



Title	引用表現形式に由来する文末詞の対照：山形市方言ズ、山口方言チャ、東京方言ツテ・ツテバについて
Author(s)	船木, 礼子
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2000, 2, p. 35-46
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/23175
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

引用表現形式に由来する文末詞の対照 — 山形市方言ズ、山口方言チャ、東京方言ツテ・ツテバについて —

船木礼子

【キーワード】ズ、チャ、ツテ、ツテバ、引用表現

1. はじめに

本稿は、山形市方言の「ズ」、山口方言の「チャ」、東京方言の「ツテ」および「ツテバ」を対照することにより、引用表現形式から発展したと考えられるこれらの文末詞がどのような特徴をもっているか、またそれぞれの方言の文末詞が相対的に文法化の過程のどの位置にあるのかを考察するものである。

対象とする文末詞については、山形市方言は渋谷（2000、本誌所収）、山口方言は船木（2000、本誌所収）、東京方言は守時（1994）、堀口（1995）による記述を主に参照し、各方言を母方言とする話者による適格性判断もおこなっている¹⁾。

以下、まず伝聞・引用表現と文末のモーダルな表現との形式の関係を確認した上で(2.)、文末詞「ズ」、「チャ」、「ツテ」・「ツテバ」の生起する環境を整理する(3.)。次に、各文末詞の用法を分類し(4.)、最後に各文末詞の対照作業をおこなう(5.)。

なお、用例は共通語で記し、焦点となる部分のみ方言形をカタカナで示す。

2. 伝聞・引用表現形式との関係

まず、各方言における伝聞表現、引用表現の各形式と、本稿で扱う文末詞「ズ」「チャ」「ツテ」「ツテバ」との関係についてみておく。なお本稿では、論の中心である各文末詞のモーダルな表現と区別するために、伝聞表現と引用表現を以下のように定義する²⁾。

(1) 伝聞表現：その発話の命題は話し手が他から聞いて（読んで）得た知識であり、これを話し手が自身の判断を加えずに伝達する表現。命題の情報源は、話し手が既に行つた発話でも聞き手のそれでもない。

(2) 引用表現：その発話の命題は先行する発話からメタ的に引用したものであり、これを話し手が自身の判断を加えずに伝達する表現。

山形市方言では、伝聞表現形式は「ド」、引用表現形式は話し手以外の発話の引用には「ド」「テ（ユウ）」、話し手の発話の引用には「テ（ユウ）」が用いられ、文末詞「ズ」とは形式が異なっている。

(3) 〈伝聞〉 太郎は今度、香港に行くんだド。（行くんだって）

(4) 〈話し手以外の発話の引用〉 先生が、「早く行け」ド/だ ド/テ（ユタ）。

(5) 〈話し手自身の発話の引用〉(何と言ったのかを問われて)「早く行け」テユタ。

(6) 〈文末詞〉(何度言っても行かない相手に) 早く行けズ。

なお、相手の発話内容を受け入れることができず喧嘩ごしで応答する場合にも「ド」が用いられるが、この場合は断定辞「ダ」が必ず必要である。

(7) a:おまえ、はつきりいってばかだな。

b:何 {だテ/だド/*ド/*だズ} ! もう一回言ってみろ !

山口方言では、伝聞表現形式は「ト」と「テ」、引用表現形式は「ト」と「ッテ (ユウ)」、文末詞は「チャ」である。ただし、話し手自身が既に行った発話を引用する場合 ((3')) は「ト」が不適格となることから、伝聞表現と引用表現は連続的でありながらも、引用した命題が話し手の発話か、他から聞いたり読んだりして得たものかという情報源の種類によって区別されうることがわかる。なお、文末詞「チャ」は準体助詞「ン」に接続するとき以外は常に促音を伴って「ッチャ」となるため、以下では「ッチャ」と表記する。

(3') 〈伝聞〉太郎は今度、香港に行くんト/行くんテ。(行くんだって)

(4) 〈話し手以外の発話の引用〉先生が、「早く行け」ト (*ユウタ) /ッテ (ユウタ)。

(5) 〈話し手自身の発話の引用〉(何と言ったのかを問われて)「早く行け」*ト/ッテユウタ。

(6) 〈文末詞〉(何度言っても行かない相手に) 早く行けッチャ/行きーッチャ。

(7) a:おまえ、はつきりいってばかだな。

b:何 {テ/*ト/*ッチャ} ! もう一回言ってみろ !

なお、引用表現には

(8) 天気予報は、明日は雨ッチューチョッタ (雨だと言っていた)

(9) 天気予報は、明日は雨ッチューテユーチョッタ (雨だと言っていた)

のどちらもほぼ同義で用いられている。(8) は「と」と「言う」とが音融合したもの、(9) は「と」と「言って」が音融合したものであろうが、(9) の「ッチューテ」には動詞「言う」の意味が含まれておらず、直後に動詞「言う」が接続する。つまり、(9) の「ッチューテ」は(8) の融合形から一步進んで引用表現の一形式となっているといえるだろう。

東京方言では、伝聞表現形式には「ッテ」、引用表現形式は「ッテ」および「ト (イウ)」が用いられており、「ッテバ」はどちらにも不適格である。文末詞には「ッテ」「ッテバ」の両形式が用いられる。

(3") 〈伝聞〉太郎は今度、香港に行くんだッテ/*ッテバ (行くんだって)

(4") 〈話し手以外の発話の引用〉先生が、「早く行け」ッテ (イッタ) /*ッテバ/ト (イッタ) / だッテ (*イッタ)

(5") 〈話し手自身の発話の引用〉(何と言ったのかを問われて)「早く行け」ッテイッタ/*ッテバイッタ/トイッタ

(6") 〈文末詞〉(何度言っても行かない相手に) 早く行けッテ/ッテバ

(7") a:おまえ、はつきりいってばかだな。

b:何 {だト/だッテ/*だッテバ} ! もう一回言ってみろ!

以上のように、東京方言の「ッテ」は伝聞表現、引用表現、文末詞としてのモーダルな表現のいずれにも使われる形式であるのに対し、「ッテバ」は文末専用の形式である。この点では文末詞としての「ッテ」と「ッテバ」に微妙な用法の使い分けがある可能性があるのだが、これについての記述は今後の課題としたい³⁾。本稿では、対照の際にはこれら文末詞としての「ッテ」「ッテバ」をまとめて扱い、表記を「ッテ(バ)」とする。

3. 文末詞「ズ」「ッチャ」「ッテ(バ)」の共起関係

3.1. 文タイプによる制限

山形市方言の「ズ」、山口方言の「ッチャ」、東京方言の「ッテ(バ)」には文タイプによる制限がなく、いずれも汎用的な文末詞といえる。

- (10) 〈平叙文〉明日は雨 {だズ/ッチャ/だッテ(バ)}。
- (11) 〈WH 疑問文〉そんなこと、いつ言った {ズ/かッチャ/ (か) ッテ(バ)}。
- (12) 〈Yes-No 疑問文〉明日は雨が降るか {ズ/ッチャ/ッテ}。
- (13) 〈命令文〉早く行け {ズ/ッチャ/ッテ(バ)}。

3.2. 生起する位置と共起する他の文末詞について

「ズ」「ッチャ」「ッテ(バ)」はいずれも主節の文末に位置し、A～C類の従属節内には生起しない。また、他の文末詞との共起関係は以下のようになる。

山形市方言の「ズ」は、判断のモダリティ（推量の「べ」など）と伝達のモダリティ（文末詞「ネ」）の間に生起するが、山形市方言には伝達のモダリティのさらに外側に意外性などを表す文末詞「ハ」が生起する文法カテゴリがあるので、「ズ」に後接する文末詞は「ネ」と「ハ」ということになる。

- (14) あのころは、俺たち毎日けんかばかりしていたケズネ
- (15) 〈話し手の本意ではないが、相手を説得しなければならないといった状況で〉

早く行ゲザー (<行ゲ+ズ+ハ>) (渋谷 1999)

山口方言の「ッチャ」も山形市方言の「ズ」と同じく主節の文末にのみ生起し、伝達のモダリティ形式「ネ」が後接する。ただし、山形市方言の「ハ」に相当する文法カテゴリはない。

東京方言の「ッテ(バ)」には、伝達のモダリティ形式「ネ」、「ナ」は接続しない。

4. 用法

本稿では、「ズ」「ッチャ」「ッテ(バ)」の用法の対照にあたり、

- (ア) 引用・参照する対象の有無（有る場合はその内容）
- (イ) 話し手の既定の認識と聞き手の既定の認識との関係を、話し手がどう把握して

いるか

(ウ) 話し手/聞き手の実際の認識の状態 ((イ) とのギャップの有無)

(エ) 話し手の態度・要求のありかた

(オ) 誰めあての発話か

の五つの観点から記述を深め、それぞれの形式のもつ用法を 〈I〉～〈VIII〉に分類する。

4.1. 用法 〈I〉「聞き返し」

(16) a:私、十八よ。

b:十八 {*だズ/*ッチャ/だッテ/*だッテバ} !? うそだろ?

b は、直前の a の発話内容が信じられず、その発話を繰り返すことによって a に発話内容の真偽を聞き返している。この場合、東京方言の「ッテ」以外はすべて不適格である。これを用法 〈I〉 とすると、その特徴は以下のように説明できよう。

(ア) 直前の聞き手の発話内容を引用。

(イ) 話し手は当該の命題に対する既定の認識をもっており、それは聞き手の既定の認識と等しいはずだと判断している。

(ウ) 話し手は直前の聞き手の発話から、話し手の既定の認識が聞き手の既定の認識と異なっていることを知っている。

(エ) 話し手は聞き手に、聞き手の既定の認識が自分の既定の認識と異なっていることを伝えたい。

(オ) 聞き手、あるいは話し手自身（聞き手あるいは情報源（テレビ報道など）が絶対的な情報をもっている場合）

話し手は、自分の既定の認識が（ア）の直前の聞き手の発話内容と照らして異なっていることを理解した上で、直前の聞き手の発話をメタ的に引用し繰り返す。これによって、話し手は聞き手の発話内容を信じられないでいる、あるいは信じがたいと思っている、といったニュアンスが生じていると考えられる。

つまり、この用法 〈I〉 は引用表現が基になっており、聞き手の発話をメタ的に引用するという点では引用表現そのものといえるだろう。だが、発話をした当人である聞き手に対してその発話を繰り返す点、またそうすることによって、話し手の認識が引用した発話をすなわち聞き手の認識と異なっていたことや、聞き手の発話内容を信じられないことなど、話し手自身の判断を加えるという点で、一般的な引用表現と区別される。

4.2. 用法 〈II〉「呼びかけ」

東京方言の「ッテバ」と山口方言の「ッチャ」は（17）（18）のように呼びかけにも使用できるが、山形市方言の「ズ」は呼びかけでは不適格である。

(17) a1:お母さん。

b2: (お母さんは振り返らない)

a3:お母さん {*ズ/ッチャ/?/?ッテ/ッテバ}。

(18) a1:ねえ。

b2: (b は振り返らない)

a3:ねえ {*ズ/ッチャ/ッテ/ッテバ}。

このような呼びかけにおける「ッテ (バ)」や「ッチャ」は、

(ア) 話し手が既におこなった呼びかけの発話

(イ) 話し手の呼びかけが聞き手に聞こえており、話し手の認識 (呼んだこと) と聞き手の認識 (呼ばれたこと) とはつながっていると、話し手が判断している。

(ウ) 呼びかけは聞こえているはずなのだが、聞き手は振り返らない。

(エ) 話し手は聞き手に、呼びかけに応えさせたい。

(オ) 聞き手めあて

という特徴をもっている。これを用法 〈II〉 とする。

では、なぜ山形市方言の「ズ」は呼びかけの用法がないのだろうか。

まず、「ズ」のうける命題は話し手にとっての既定の認識に限られているため、「呼びかけ」という話し手の既定の認識をいいあらわしているわけではない発話においては「ズ」が不適格になるということが、一つの理由として考えられる。また、山形市方言では「名詞+ズ」ではなく「名詞+ダ+ズ」のみが用いられていることをふまえると、「ズ」のうける命題が「PはQだ」の「Qだ」の部分、すなわち話し手の判断を述べるものでなければならないことを意味しているともいえるかもしれない。

話し手の既定の認識とは、話し手のなかで既に確定している意見や考えのことである。呼びかけは、その発話によって話し手の既に確定した意見や考えを述べているのではなく、その発話行為 (聞き手の名を呼ぶこと) によって聞き手の注意を話し手の方に向けさせるという発話内行為を指示するものである。つまり、「呼びかけ」という行為の中で「ッテ (バ)」や「ッチャ」がマークするのは直前の話し手自身の発話 (一度目の呼びかけ) だが、「ズ」がマークするのはそれではなく、あくまで話し手の既定の認識だと考えられる。

4.3. 用法 〈III〉 典型的な用法

「ズ」「ッチャ」「ッテ (バ)」すべてに共通しており、もっとも典型的なのが、以下 b4 のような用法である。これを用法 〈III〉 としよう。

(19) a1:大丈夫かなあ。

b2:大丈夫だよ。行ってみなよ。

a3:ホントに大丈夫かなあ。

b4:ホントに大丈夫 {だズ/ッチャ/だッテ/だッテバ}。

この用法は、話し手が自分の発話内容を再度提示するものである。(19) のように聞き

手が話し手の発話内容を受け入れていないだけでなく、聞き手が話し手の発話内容を忘れていたり ((20))、話し手の意図を理解していなかったり ((21)) する場合にも用いられる。

(20) a1: あそこなら、前にも行ったよ。

b2: え、 そうだけ？

a3: 去年の夏休みに行った {ケズ/ッチャ/ッテ/ッテバ}。覚えてないの？

(21) a1: 明日は雨だよ。

b2: そうだなあ……そうだ！ 魚りにでも行こうか。

a3: おいおい、 明日は雨 {だズ/ッチャ/だッテ/だッテバ}。

〈b2 は「雨」は認識していても、「雨」に含まれる「だから魚りはできない」ということをまでは認識していない。〉

用法 〈III〉 の使用に関する以下のような制約も、各形式に共通している。

まず、新規の情報を述べる場合（問い合わせに対する一度目の答えも含む）には使用できない。

(22) #俺さ、 きのう映画見に行ったん {ダズ/ッチャ/ダッテバ}。そしたらさ…

(23) a: そっちの天気はどう？

b: # うん、 いい天気 {ダズ/ッチャ/ッテバ}

ただし、4.7.で記述する山口方言の「ンチャ」は新規の情報を述べる場合でも使用できるが、これは「ッチャ」とノダ文との意味的な結びつきがあると考えられるものもあるため、用法 〈VII〉 として用法 〈III〉 と区別する（4.7.参照のこと）。なお、名古屋方言や豊中市方言の若年層などには (24) (25) のように「～ッテ」を新規情報を述べるのに使用するとの情報があり⁴⁾、今後確認する必要がある。

(24) おれ、 昨日、 映画見に行ったんだッテ。それでね…

(25) a: 実は、 おれ、 明日は旅行ッテ。

b: ふーん。

もう一つの共通の制約とは、話し手がいま新たに獲得した認識を表明する場合には使用できないというものである。

(26) #あっ、 わかった、 このボタンを押すん {ダズ/ッチャ/ダッテ (バ)}。

つまり、話し手が過去のある時点に認識したことを話し手が再認識する過程がなければ「ズ」「ッチャ」「ッテ (バ)」は使えないである。また、

(27) C 先生: 〈授業中に〉 今週中にレポートを提出してください。

a: 〈授業後〉 私、 今週はもう大学に来ないから、 この C D は来週返してね。

b: # 何言ってんの、 今週中にレポートを出すん {だズ/ッチャ/だッテ (バ)}。

のように、話し手と聞き手の共通認識であるはずの命題（「今週中にレポートを提出する」）が既に提示されていても、話し手がその命題を認識していることを（発話などによって）一度は聞き手に伝えたことがなければ、これらの文末詞は使えない。

以上から、これらの文末詞の使用については、既に行われた話し手の発話、さらに言えば話し手の既定の認識を既に聞き手に提示していることが前提になっているといえる。

こうした特徴をまとめると以下のようになる。

- (ア) 話し手の既定の認識の提示（発話）
- (イ) 話し手の既定の認識と聞き手の既定の認識が等しいはずと話し手が判断している（聞き手が一度はそれを認識したと思っている）。
- (ウ) 聞き手の認識は話し手の期待に反し、話し手の認識と異なっている。
- (エ) 話し手は聞き手に、話し手と同じ認識をさせたい。
- (オ) 聞き手めあて

したがって、これらの意味特徴から、認識しておくべき内容を認識していなかった聞き手に対するいらだちや非難のニュアンスが生じる。このいらだちや非難のニュアンスも「ズ」「ッチャ」「ッテ（バ）」に共通するものである。

4.4. 用法（IV）事実による話し手の既定の認識の変更の表示

山形市の「ズ」と山口の「ッチャ」は、話し手の常識などでは考えにくいことが事実として示されたとき、それに対する驚きを表す文脈にも用いられる。東京方言では、この用法は不安定である。

(28) それにしても、あんな幼い子がよく一人で行けた {ズ/ッチャ/? ッテ/# ッテバ}。

(29) C子って、上司に向かってよくあんなこと言える {ズ/ッチャ/# ッテ/# ッテバ}。

これは、話し手が自分の思っていたことと示された事実とのギャップによって生じた驚きを表す機能をもつので、情報量が「聞き手>話し手」である場合にも聞き手に対してこれらの文末詞を使うことができる。

(30) a:しかし、おまえの今日の記録はすごい {ズ/ッチャ/? ッテ/# ッテバ}。

b:あたりまえさ/まあね/たまにはそんなこともあるさ

(31) a:あなたって、上司に向かってよくあんなこと言える {ズ/ッチャ/? ッテ/# ッテバ}。

b:あれぐらい、ふつうよ。

これらの例からもわかるように、「しかし」などが共起することが多い。これは、話し手はその事実を知るまでは経験的・常識的にある認識をしていたが、事実がその経験や常識と異なるものであったため、容易にはその事実を信じにくい。しかし、その事実を話し手が自分自身に再度言い聞かせることで、話し手はその信じがたい事実を再認識している、ということをこの文末詞が表しているためであろう。また、そのように話し手が再認識しようとしていることを言語化することにより、そうしなければならないほど信じがたいことなのだという、話し手自身の驚きなどのニュアンスが生じているといえる。

以上の特徴を、以下のようにまとめると

- (ア) 話し手の既定の認識と、提示された事実

- (イ) 提示された事実が話し手の既定の認識と異なっている。
- (ウ) 話し手の認識のみ明らか (聞き手の認識は特に問題にしていない)
- (エ) 話し手は聞き手に、話し手の認識の変更 (驚き) を伝えたい
- (オ) 話し手自身あるいは聞き手

このうちの (ウ) に関して補足すると、用法 〈IV〉 では話し手の認識のみ明らかで聞き手の認識は特に問題にしていないのだが、聞き手も驚いているだろうという予想が話し手にある場合に、山形市方言では「ズネ」、山口方言では「ツチャネ」のように「ネ」を接続して、次節に述べる聞き手に同意を求める表現になる。ただし、これは東京方言にはないものである。

(32) a: しかし、太郎の車っていい {ズネ/ツチャネ/*ツテ (バ) ネ}。 (いいよね)
b: {ンダズネ/ソレツチャネ/*ソウダッテ (バ) ネ}。 (そうだよね)

4.5. 用法 〈V〉 「ネ」後接用法

「ズ」「ツチャ」には「ネ」が後接し、「ズネ」「ツチャネ」となることがある。東京方言の「ツテ (バ)」は「ネ」や「ナ」と共起することがなく、「ツテ (バ)」があくまで聞き手に対して一方的に話し手の認識を伝えるものであることがわかる。

(33) あの人、雨でも毎日ジョギングしてる {ズネ/ツチャネ/*ツテ (バ) ネ}。

これは、聞き手に同意を求める (認識が同じであることを確認する) ものであり、「ネ」によってそうした意味が付加されているといえる。

なお、用法 〈III〉 と同様、その場で初めて認識したことについては使用できない。

(34) #へえ、よくみるとあいつって△△に似ている {ズネ/ツチャネ/ツテ (バ) ネ}。

このような「ズネ」「ツチャネ」は、以下のようないくつかの特徴をもつといえる。

- (ア) 話し手の既定の認識
- (イ) 話し手の既定の認識と聞き手の既定の認識が等しいと話し手が判断している。
- (ウ) 話し手の認識のみ明らか
- (エ) 話し手は聞き手に、互いの認識が等しいことを確認したい
- (オ) 聞き手めあて

4.6. 用法 〈VI〉 聞き手の認識との一致の伝達

「ズ」「ツチャ」にみられる用法に (35) のようなものがある。

(35) a: 明日もまた雨だってよ。たまんないなあ。
b: {ンダズ/ソレツチャ/#そうだッテ (バ)}。ほんとにいやになる {ズ/ツチャ/#ツテ (バ)}。 (≈ そうなんだよ。本当にいやになっちゃうよ。)

「イヤになる」といった評価が、直前の a の発話からわかる a の評価「また雨だ」「たまらない」と同じであることを伝える機能がある。したがって、直前の聞き手の発話から

そうした評価が読みとれない (36) のような場合は、「ズ」「ッチャ」は使用できない。

(36) a: 明日、雨だね。

b: { #ンダズ/#ソレッチャ}。

この用法は以下のようにまとめられる。

(ア) 話し手の既定の認識と直前の聞き手の発話

(イ) 話し手の既定の認識と、発話からわかる聞き手の既定の認識と同じだと話し手が判断している。

(ウ) 聞き手が述べた認識は話し手の認識と同じ。

(エ) 話し手は聞き手に、話し手の認識が聞き手のそれと同じことを伝えたい。

(オ) 聞き手めあて

4.7. 用法〈VII〉話し手だけがもつ既定の認識の伝達

「ズ」と「ッチャ」は、いわゆるノダ文の文脈で以下のような用法がみられる。ノダ文といっても、聞き手の知らない命題について話し手が告白したり、教示したりするもの、つまり野田 (1997) の「対人的ムードのノダ」にあたるものに限られる。

(37) a: 実は、今はもう走れないけど、おれは中学時代にマラソンをやってた {ンダズ/ンチャ/#ンダッテ (バ)}。(マラソンをやっていたんだ)

b: へえ、そうなの。

ただし「ンダズ」と「ンチャ」には、新たな情報・新規のトピックを持ち出す場合に、「ンダズ」は使えない場合があるが「ンチャ」は常に適格であるというちがいがある。

(38) a1: おれ、昨日、映画を見に行った {#ンダズ/ンチャ/#ンダッテ (バ)}。

b2: うん。

a3: そしたらね、……

(39) a1: わたし、昨日は鍼に行った {ンダズ/ンチャ/#ンダッテ (バ)}。

b2: へえ、鍼になんか行ったの。

a3: そなんなんだ。その鍼の効き目ってのがすごいんだ。……

(40) a1: わたし、明日から学会に行く {ンダズ/ンチャ/#ンダッテ (バ)}。

b2: へえ、学会。

a3: で、その学会ってのは名古屋である {ンダズ/ンチャ/#ンダッテ (バ)}。……

山形市方言の「ズ」は、次節で述べるが、聞き手への訴えかけ性を強く表に出した、聞き手を話に引き込むというストラテジックな用法を確立しているため、(38) のようにありきたりな話題では「ズ」が使いにくいが、(39) (40) のように少々信じがたい話題や聞き手にはあまりなじみがないと思われる話題では、話の初めから説得するつもりでとりかかるため、「ズ」が使えるのであろう。

これらから、「対人的ムードのノダ」の文脈と共に起する「ンダズ」と「ンチャ」の特徴

は以下のようにいえるだろう。

- (ア) 話し手の既定の認識のみ
- (イ) 話し手の既定の認識のみ存在し、聞き手にはそれが無いと話し手が判断
- (ウ) 話し手は既定の認識があるが、聞き手はそれをもたない
- (エ) 話し手は聞き手に、話し手の既定の認識を伝えたい
- (オ) 聞き手めあて

4.7. 用法〈VII〉聞き手を話に引き込む用法

前節の用法〈VII〉に似ているが、ここで述べる用法〈VII〉は以下のようなものである。

- (41) あいつ/おれって、昔はよく飲み歩_{イタケズ/キヨッタツチャ/#イテタツテ(バ)}}。

用法〈VII〉とのちがいとしては、ノダによる背景説明の補助がなくても「ズ」「ッチャ」だけで話し手の既定の認識を聞き手に伝えることができる点があげられる。

ただし、山形市方言の「ズ」は聞き手に対して話し手と聞き手の双方が知っている話題について述べる場合にも適格であるのに対し、山口方言の「ッチャ」は聞き手の知っている可能性が高い話題には使いにくいという差異がある。

- (42) おまえもおれも、高校時代はよくけんかした_{ケズ/??ッチャ}。

以上から、用法〈VII〉の特徴を次のようにまとめると

- (ア) 話し手の既定の認識
- (イ) 話し手の既定の認識のみ存在
- (ウ) 話し手の既定の認識はあるが、聞き手のその有無は問われていない
- (エ) 話し手は聞き手に、話し手の既定の認識を伝え、話に引き込みたい
- (オ) 聞き手めあて

5. まとめ — 用法の対照

5.1. 伝聞表現、引用表現との関わり

山形市方言「ズ」と山口方言「ッチャ」は伝聞・引用表現と形式上区別でき、文法化が進んでいるといえる。これに対し、東京方言の「ッテ」は引用表現の性格を残し（現に引用表現として使われ）ており、「ッテ」と「ッテバ」は文末において競合の状態にある。

なお、伝聞・引用表現に断定辞が介在するかどうかという点では、山形市方言と東京方言は「ダ」が介在するものとしないものの二通りがあるが、山口方言の場合は断定辞が全く介在しないという差異があった。この点は、断定辞の性質のちがいも考慮する必要があるため、本稿ではこれ以上触れることができない。

5.2. 生起環境

「ズ」「ッチャ」「ッテ(バ)」は、文タイプについていはずれの文末詞にも制限がない。

また「ズ」「ッチャ」「ッテ (バ)」の文内の位置も、A～C類の従属節内には生起せず、主節文末のみであり、大きな差異はない。

5.3. 用法

用法 〈I〉～〈VIII〉は、

①何を引用あるいは参照しているか (イコン性)
 ②引用あるいは参照した内容と話し手の既定の認識とがマッチしているか (マッチ度)
 という二つの視点から、次の表のようにまとめられる。

〈表〉用法の対照表

イコン性	H 発話 (引用)	S 発話 (引用)	S 発話 (引用)	事実 (参照)	H 認識 (参照)	H 発話 (参照)	— (—)	
マッチ度	マッチしない				確認	マッチ	—	
	〈I〉	〈II〉	〈III〉	〈IV〉	〈V〉	〈VI〉	〈VII〉	〈VIII〉
ズ	×	×	○	○	○	○	△	○
ッチャ	×	○	○	○	○	○	○	△
ッテ (バ)	○	○	○	△	×	×	×	×

H:聞き手 S:話し手 —:話し手の既定の認識のみが前提となる
 ○:該当する用法あり ×:該当する用法なし △:使えない場合がある

イコン性に関しては、表の左の 〈I〉～〈III〉 は具体的な引用の対象をもっており、イコン性が高い。しかし、表の右へいくほどイコン性は薄くなり、〈VII〉〈VIII〉 は話し手の既定の認識だけを発話の前提としているため、イコン性はないといえる。

話し手の既定の認識と引用・参照した内容とのマッチ度に関しては、〈I〉～〈IV〉 はマッチしないのだが、〈V〉 はマッチするとの話し手の推定を聞き手に確認するものであるため、〈VI〉 と同様にマッチするものとみなせる。これに対し、〈VII〉〈VIII〉 は話し手の既定の認識のみに基づくものであり、マッチするか否かという観点は質的にそぐわない。

この表から、表の左の用法ほど引用表現の特徴が濃く、右ほど希薄だといえる。また、表の左ほど実際の発話の引用 (繰り返し) によって聞き手への働きかけが強くなり、表の右へずれるにしたがって、実際には発話によって示されたことのない、つまりメタ的な引用のできない既定の認識を参照する用法になり、聞き手への働きかけが弱くなるともいえるだろう。用法 〈VII〉〈VIII〉 に至っては、話し手の既定の認識が存在するのみで他を引用はもとより参照することもない、聞き手への一方的な情報の伝達になっている。

5.4. まとめ

以上の対照結果をひとことでまとめると、以下のようにいえるだろう。

東京方言の「ッテ」は引用表現形式と重なっており、文末専用化したものに「ッテバ」

はあるが、メタ的に引用できる場合に用法がほぼ限られている。山口方言の「ッチャ」は、メタ的に引用できない命題にも使え、また話し手から聞き手への一方的な情報伝達にもノダ文の補助の上で用いられる。そして山形市方言の「ズ」は、「PはQだ」の「Qだ」の部分にのみ用いられ、ノダ文の補助なしに話し手から聞き手への一方的な情報伝達に使われる。すなわち、最も引用表現の性質が残っているのが東京方言の「ッテ」で、「ッテバ」、「ッチャ」、「ズ」の順に引用表現からより遠ざかった用法を獲得しているといえる。

【注】

- 1) 各方言についての内省は、山形市方言は渋谷勝己氏、東京方言は辻加代子氏、山口方言は筆者による。東京方言は共通語と同じように捉えがちだが、文末詞のなかでも本稿で扱うようなカジュアルなスタイルでなければ運用しづらい項目を記述・分析の対象とする場合、東京方言と共通語のちがい、さらには東京方言以外の話者がどのような体系を共通語と捉えているのかという問題が生じる。実際、「ッテ (バ)」について筆者が共通語としては不適格だと判断した例が、東京方言話者には適格、あるいは使用する可能性があると判断されるケースがあった。
- 2) ただし、伝聞表現と引用表現は連続的なものであり、すべての用例が截然と区別できるわけではない。例えば(43)のように、聞こえなかった発話内容を聞き返すという引用とはいづらいものも類似の表現としてあげられるが、本稿では扱わない。

(43) a: 私、十八よ
 b: 〈山形市〉 え、何 {φ/?だテ/*だド/*だズ} ? よく聞こえないよ。
 b': 〈山口〉 え、何 {φ/テ/*ッテ/*ト/*ッチャ} ? よく聞こえないよ。
 b": 〈東京〉 え、何 {φ/だッテ/#だト/*だッテバ} ? よく聞こえないよ。

- 3) 例えば、4.1.「聞き返し」には「ッテ」のみ適格で「ッテバ」は用いることができない。また、4.2.「呼びかけ」では、前接要素の内容によって適格性判断がゆれている。
- 4) 高木千恵氏(名古屋方言)、西尾玲見氏(豊中市方言)にご教示いただいた。いずれもゼミの討論の中でご指摘いただいたものであり、若年層に特有の用法である可能性がある。

【参考文献】

渋谷勝己(1999)「山形市方言の文末詞ハ」『阪大社会言語学研究ノート』1
 ——— (2000)「山形市方言における文末詞ズ」(本誌所収)
 野田春美(1997)『の(だ)の機能』くろしお出版
 船木礼子(2000)「山口方言の文末詞チャ」(本誌所収)
 堀口純子(1995)「会話における引用の「～ッテ」による終結について」『日本語教育』85
 守時なぎさ(1994)「話し言葉における文末表現「ッテ」について」『筑波応用言語学研究』1

ふなき れいこ(大阪大学大学院生)

funef8618@let.osaka-u.ac.jp